

# 令和2年度 学校経営計画書

石川県立金沢泉丘高等学校（全日制課程）

学校長 宮本雅春

## 1 教育目標

心身一如の発達につとめて

真理を求め、勉学を第一義とすること

情操を豊かにし、自らの品位を高め、他者の人格を重んずること

正義を愛し、誠実にして、社会から信頼されること

## 2 中・長期的目標

### (1) 学校の現状

- ① 本校は、創設以来「心身一如」を校是とし、調和のとれた人材育成に取り組んでいる。「確かな学力」を身につけさせるとともに、次世代を担う心身共に健全で品位と良識あふれるリーダーの育成をめざし、保護者や県民から信頼される学校づくりを進めている。
- ② 大学進学に関して、県内有数の進学校としての実績を収めている。世界を視野に高い志を掲げて学習させるとともに、第一志望を実現させることをめざしている。
- ③ 平成15年度からSSH研究開発1期目の指定を受け本年、4期目が終了する。5期申請に向け、国際的に活躍できる科学技術系人材の育成プログラムの完成を目指している。
- ④ 平成27年度からの5年間のSGHの指定が終了し、グローバルな社会課題に関し、多面的に考え、多角的に行動する力を備えた、国際舞台で活躍する人材の育成のための本校独自の探究活動プログラムが形になり、本校普通コースにもその指導のノウハウは波及している。そして新しい金沢泉丘SGHプログラムの開発に取り組んでいる。
- ⑤ 平成24年度に「いしかわニュースーパーハイスクール」の指定を受け、人文科学、自然科学の両分野における幅広い教養を身につけ総合力を備えた、国際性に優れた次世代を担うリーダーの育成をめざしている。本県ニュースーパーハイスクールの牽引役の使命を担っている。

### (2) 生徒に関する中・長期的目標

- ① 「確かな学力」の育成  
進学実績の向上をめざし、確かな知識に基づいた深い学びにつながる質の高い教科指導を、ICTの活用や主体的・協働的な学習方法を取り入れながら、組織的に展開する。
- ② 豊かな心の育成  
「心身一如」の具現化に向け、部活動・学校行事・社会奉仕活動等の教育環境・設備を整え、次世代を担うリーダーに必要な人格の陶冶をめざす。

### (3) 教職員・学校組織等の望ましい在り方

- ① 指導力の向上と組織の活性化  
県民目線で教育公務員としての規範意識をしっかりとち、法令を遵守する。効果的な教育活動を展開するために、研究授業や職員研修会を通して教職員の指導力を高める。また、組織運営の合理化・効率化を推し進めることにより、教職員がワーク・ライフ・バランスを維持し、活力と創造力を十分に発揮することのできる職場環境を形成する。
- ② 開かれた学校づくり  
本校の方針や特色ある取り組みを、積極的に県民に伝え、広く協力・支援が得られる学校とする。また、PTAや地域社会とも連携することによって、本校の教育活動が有機的に展開することをめざす。

## 3 今年度の重点目標

創立127年目を迎える歴史と伝統を踏まえ、建学精神に基づいた教育活動の実践に努める。

- (1) 「勉学を第一義とする」を踏まえ、質の高い学力を育成する。  
・ 知的好奇心旺盛な生徒に質の高い授業を提供する。生徒の質問力を高めるなど指導法の研究・改善に努める。新しい大学入試で求められる力及び大学卒業後もイメージし、過年度生も含めた生徒の高い進路志望の実現を図る。
- (2) 探究活動プログラムの進化・発展に努める。  
・ これまで積み上げてきたSSH・SGHプログラムを進化・発展させるとともに、その指導法を本県高等学校に波及させる。また、SSH5期申請に向けSSH・SGHプログラムを融合させるなど新しい探究活動プログラムを研究する。
- (3) 「品位を高め、他者の人格を重んずること」を踏まえ、よりよき集団づくりをめざし、絶えず自己研鑽に努める生徒を育てる。  
・ 挨拶の励行、体力の向上、環境美化、部活動・生徒会活動の活性化に努める。
- (4) 「正義を愛し、社会から信頼されること」を踏まえ、生徒とともに開かれた学校づくりに努める。  
・ 授業公開など学校公開の機会の拡大を図る。地域社会と連携したボランティア活動を推進する。
- (5) 組織運営・教職員の働き方の改善により、教育活動の効果を一層高める。  
・ 効率的で密度の濃い学習活動、部活動・生徒会活動の推進に努める。

令和2年度 学校経営計画に対する最終評価報告

石川県立金沢泉丘高等学校

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)および次年度の扱い(改善策)
<p>1 「勉学を第一義とする」を踏まえ、質の高い学力を育成する。</p> <p>知的好奇心旺盛な生徒に質の高い授業を提供する。生徒の質問力を高めるなど指導法の研究・改善に努める。新しい大学入試で求められる力及び大学卒業後もイメージし、過年度生も含めた生徒の高い進路志望の実現を図る。</p>	<p>① 授業を通して「生徒の質問力の向上」を目指す。そのために、「生徒の質問力」をテーマとした研究授業を、各教科や少人数のグループで行い、授業改善に取り組む。</p>	<p>「授業が充実しているか」の質問に対して、以下の①から④と答えた生徒の割合を算出し、順に4、3、2、1を乗じて、加えた値<math>\alpha</math>を算出する。</p> <p>①「よくあてはまる」 ②「ややあてはまる」 ③「あまりあてはまらない」 ④「全くあてはまらない」 <math>\alpha</math>の値が A 3.60以上 B 3.55以上 C 3.50以上 D 3.50未満</p>	<p>[判定] A 3.63</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・12月に実施した授業評価で、「授業が充実しているか」の質問に対する全体の平均が3.63であった。一昨年同時期3.55、昨年同時期3.62と比べて上昇している。一昨年、昨年からの数値の上昇は、8月実施の授業評価でも同様の結果であった。昨年度から、授業で扱う教材の教員間での共有化が進み、これまで以上に授業改善がなされ、生徒が主体的・能動的に参加する授業になっているからと思われる。また今年度、休校期間が続き、生徒が授業の大切さを例年以上に感じていることも理由と思われる。</li> <li>・今年度、授業での「生徒の質問力の向上」を目指した。これをテーマにした研究授業を行うなどしたが、まだ生徒が変容している実感はない。来年度に向け、今まで以上にこのテーマについて、生徒および先生方に呼びかけていき、さらに授業改善につなげていきたい。</li> </ul>
	<p>② 模試や大学入試の分析結果を提供し、大学・学部研究を深め、難関大学を志望する生徒の意欲を高める。特に、3年生には、東大・京大・医学部説明会や補習など、第1志望を貫く集団づくりを進める。また、共通テストに向け、深い思考力の育成を習熟度別授業や校内模試問題の研究により進める。</p>	<p>東京大学・京都大学および国公立大学医学科合格者の合計人数(重複可)が、 A 40人以上 B 30人以上 C 20人以上 D 20人未満</p>	<p>[判定] B 東京大学8人 京都大学17人 国公立大学医学科11人 合計36人</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東大・京大・医学科説明会を6月、10月に行い、さらに難関大別模試(実戦、オープン模試等)を夏と秋に受験させることにより、難関大学志望者の集団作りと意識付けを行うとともに、意欲を高めることができた。</li> <li>・1月末から2月初めに東大・京大出願者に対して本番実戦テスト(河合塾・駿台)を受験させ、学力向上を図った。</li> <li>・出願検討会では東京大学17人、京都大学35人、国公立医学科29人であった。例年に比べ、東京大学がやや少なく、京都大学がやや多い。国公立医学科は例年とほぼ同じである。</li> <li>・最終出願者数は東京大学17人、京都大学36人、国公立医学科18人であった。出願検討会と同様に東京大学がやや少なく、京都大学が多い出願となり、合格数も同様の傾向となった。</li> <li>・次年度は学年集会や担任面談等で東京大学をはじめとした上位大学への意識付けをさらに進め、東京大学出願数30人を目標に、京都大学、医学科への出願も増やしたい。</li> </ul>
	<p>③ ホーム担任は担当生徒に対し、年間5回以上の個別面接指導実施する。学習時間調査の結果も踏まえ、睡眠時間の確保をしつつ家庭学習の定着を図る。</p>	<p>一年間の学年団の指導が、自分の学力や学習姿勢の向上に役立ったと考える生徒の割合が、 A 95%以上 B 90%以上 C 85%以上 D 85%未満</p>	<p>[判定] A 98.8%</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・Zoomによる面談も含めて、5回～6回の面談を終えている。学年会で質問事項を確認し、睡眠時間の不足など生徒の不調にいち早く気づくことができています。成績の受けとめ方、その後の学習態度などに工夫がなされるよう努力した。</li> <li>・知的好奇心を刺激し、実際に自分の目で見て、自分で考えられるよう促すために、教科横断型の探究活動を実施した。</li> </ul>
	<p>④ ホーム担任は、年間5回以上の個別面接指導を通して、高い進路志望の確立を図る。また、学習時間調査の結果も踏まえ家庭学習の定着を図る。</p>	<p>一年間の学年団の指導が、自分の学力や学習姿勢の向上に役立ったと考える生徒の割合が、 A 95%以上 B 90%以上 C 85%以上 D 85%未満</p>	<p>[判定] B 93.8%</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・対面による面談回数は、5回から6回であり、特殊な今年度における生徒一人一人の機微をくみ取っている。また、修学旅行の中止を受け止め、最終学年へ切り替えるよう指導した。</li> <li>・高めた志望を下げない生徒が多い中、授業内容の高度化と周囲の意識についていけず、戸惑う生徒も見られる。教科担当やホーム担任を通じて、学年全体が能動的に受験勉強をスタートさせる意識づけを丁寧に行いたい。</li> </ul>
	<p>⑤ 授業内容をより充実させるとともに、放課後補習および個人添削等を通して、生徒一人一人の志望や学力にあわせた指導を展開していく。</p>	<p>難関10大学及び国公立大学医学科医学科の合格者数が、 A 100名以上 B 90名以上 C 80名以上 D 80名未満</p>	<p>[判定] A 難関10大学 95人、国公立大学医学部医学科13人、合計108人</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学年と教科、進路指導課が連携しながら、生徒一人一人の志望や学力にあわせた指導を展開している。新型コロナウイルスの影響で、遅れた授業進度を、放課後補習、個人添削等で補っている。また、個人面談を効果的に実施し、モチベーションアップやメンタル面へのサポートやケアを行った。今後も将来のビジョンを待たせながら志望校合格への強い気持ちと、学力をつけさせる指導を進めていきたい。</li> </ul>

学校関係者評価委員会の評価 ・休業時の様々なオンラインによる取組は評価できる。こうした中、勉学面など悩みを抱えている生徒もいると推測する。今後も継続しメンタルケアに取り組んでほしい。

学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策 ・ICTを活用した授業形態は今後も推進していきながら、今後も個人面談等を通して生徒の状況をより把握し指導に当たっていく。

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）および次年度の扱い（改善策）	
2 探究活動の進化・発展に努める。 これまで積み上げてきたSSH・SGHプログラムを進化・発展させるとともに、その指導法を本県高等学校に波及させる。 また、SSH5期申請に向けSSH・SGHプログラムを融合させるなど新しい探究活動プログラムを研究する。	① カリキュラムの中の科学的な課題研究活動を充実させることで、生徒の探究力・思考力・行動力の向上を図る。また、それぞれの探究活動において生徒が自らの変容を確認できるファイルの作成に取り組む。さらに文理融合の課題研究への取組も実践する。	『AI 課題研究Ⅰ』（1年）『AI 課題研究Ⅱ』『SS 課題研究Ⅰ』（2年）『AI 課題研究Ⅲ』『SS 課題研究Ⅱ』（3年）は、「探究力、思考力、行動力を高める機会になっている」の項目で、「よくあてはまる」「あてはまる」と回答するSSH主対象生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	[判定] B 1年 93.0% 2年 77.8% 3年 85.6%	<ul style="list-style-type: none"> <li>今年度はコロナ禍の影響で様々なSSH行事の変更が余儀なくされた。特に2年生の課題研究では、年度当初に行うグループ決め、テーマ設定、研究計画作成の計画が大幅に変更となり、十分な話し合いのもと研究活動をスタートさせることが難しかった。一方で、ZoomやYoutube Liveの活用によるオンライン発表会や特別講義の実施など、新しい実施形態の可能性を感じることができた。次年度以降、オンラインを積極的に活用しつつ、Authentic（本物）に触れることの大切さも重視しSSHの取組を進めていきたい。</li> <li>SGとの協働をさらに進め、「文理融合」の実現に向けて、カリキュラム開発をしていくことが課題である。</li> </ul>	
	② 課題研究を中心とした探究型学習のプログラムの改善を図り、より「文理融合」を強化したカリキュラム開発を行う。また、問いを立てる力の育成など他にも新たな目標を設定して、その達成のために事業を展開する。	『SG 探究基礎』（1年）や『SG 探究』『NS 探究 α』（2年）『SG 探究活用』『NS 探究 β』（3年）は、「自らの考えを相手を意識し客観的な根拠に基づき論理的に表現する能力を高める機会となっている」という項目で、「よくあてはまる」「おおむねあてはまる」とする生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	[判定] B 1年 88.6% 2年 88.2% 3年 85.1%		<ul style="list-style-type: none"> <li>今年度は、コロナ禍の影響で、これまで構築してきた実証的な探究学習をさらに発展的なプログラムにするという計画は、大幅に修正を迫られることになった。その一方で、生徒にとっての学びを止めないための工夫をしたことで、オンラインによる発表や指導助言の機会など新しいプログラムの可能性にもつなげることができた。次年度は、オンラインとオフラインのハイブリッドを視野に、より“実践”を意識した探究のあり方を模索し、「社会に開かれた教育課程」の実現を目指していきたい。</li> <li>SSHとの協働をさらに進め、「文理融合」の実現に向けて、カリキュラム開発をしていくことが課題である。</li> </ul>
学校関係者評価委員会の評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>今後も探究活動を推進して行ってほしい。</li> <li>新しいスタイルにおける発表などを積極的にすすめてほしい。</li> </ul>				
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策	<ul style="list-style-type: none"> <li>教育課程の特色を活かし探究活動をさらに進めていく。</li> <li>コロナの影響で様々なことに取り組んだ。オンラインによる発表形式は限界も感じた。今後どのような形がよいか検討していく。</li> </ul>				
3 「品位を高め、他者の人格を重んずること」を踏まえ、よりよき集団づくりをめざし、絶えず自己研鑽に努める生徒を育てる。  挨拶の励行、体力の向上、環境美化、部活動・生徒会活動の活性化に努める。	① 各種の講演会を生徒の発達段階に応じて適正に開催し、品位を高め心豊かで、グローバル人材となる資質を育成する。	「講演会が知識や経験を学び、生き方を考える良い機会となっている」の項目で、「よくあてはまる」+「ややあてはまる」の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	[判定] A 91.2%	<ul style="list-style-type: none"> <li>今年度は生き方講演会が中止になってしまったが、昨年度の87.5%を超える91%で、一昨年の92%には及ばなかった。今後も生徒の満足度の高い講演会を企画、実施したい。</li> </ul>	
	② 基本的生活習慣の確立を図ることを目的に、挨拶の指導を徹底する。 ・場面に応じた、元気で明るくさわやかな挨拶 ・授業の開始、終了の挨拶 ・職員室等の入室マナー	「しっかりと挨拶や会釈をしている」と答えた生徒が、 A 95%以上 B 85%以上 C 75%以上 D 75%未満	[判定] B 90.7%		<ul style="list-style-type: none"> <li>昨年比1.2ポイント減であった。</li> <li>挨拶は、人と人をつなぐ大切なことであること、他者を尊重し、良好なコミュニケーションを図るために必要なことであることを継続指導していきたい。</li> </ul>
	③ 「いじめを絶対に許さない学校づくりを推進するために未然防止の取り組みを行う。	「他人の人格を重んじ、尊重する態度で接するとともに助け合う仲間づくりができる」と答えた生徒が、 A 98%以上 B 95%以上 C 90%以上 D 90%未満	[判定] B 95.1%		<ul style="list-style-type: none"> <li>昨年比4.0ポイント増であった。今年度も挨拶指導や新型コロナウイルス感染者に対する差別防止の啓発等を通して、他者を尊重し、良好なコミュニケーションを図ることの重要性を啓発してきた。</li> <li>他者の言動を尊重し、承認する態度を育む指導を継続していきたい。</li> </ul>

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）および次年度の扱い（改善策）
3 「品位を高め、他者の人格を重んずること」を踏まえ、よりよき集団づくりをめざし、絶えず自己研鑽に努める生徒を育てる。  挨拶の励行、体力の向上、環境美化、部活動・生徒会活動の活性化に努める。	④ 部活動等の活性化及び競技力の向上を図るとともに部活動と勉学の両立（文武両道・文武不岐）をめざす。	県予選を突破しブロック大会以上の大会・行事等に出場した部活動が、 A 21以上 B 17以上 C 13以上 D 13未満	[判定] C 13の部活動が出場した（オンラインを含む）	・新型コロナウイルス感染症拡大のため、北信越体育大会、全国高等学校総合体育大会、全国高等学校総合文化祭の現地開催が中止となり、各部活動の活躍の場が奪われた。
	⑤ 環境ISO活動を意識して、環境保全に配慮した生活となるようにする。 ・ゴミの分別・節水・節電 ・学校周辺のゴミ拾い	校内の環境保全活動に努めていると答えた生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	[判定] B 86.6%	・設定した基準の数字は昨年度より上昇したが、内容を分析すると、清掃活動への取り組みについては、例年に無く消極的であった。新型コロナウイルスによる授業開始時期の遅れや感染対策の消毒等に職員が配慮したことによって、生徒の意識が受け身になったと考えられる。学習環境を整える主体性と感染予防の両立が課題である。
	⑥ 読書と学習環境の整備に努め、学校図書館としての機能と魅力を高める。 委員会活動、購入図書の精選、広報活動、教科や調べ学習の場の提供などに努め、貸し出し冊数や入館者数の増加を図る。	1年間の図書の貸し出し冊数が、 A 4,500冊以上 B 4,000冊以上 C 3,500冊以上 D 3,500冊未満	[判定] B 4,070冊の図書貸出があった。昨年に比べて3%減少した。（3月末まで）	・コロナ禍での図書館閉館（4～5月）や年間を通して閲覧室の座席を間引いたことにより、12月時点の図書貸出冊数は昨年度比26%減、図書館入館者数は44%減であったが、最終的には貸出冊数3%減、入館者数33%減となった。休校中にオンライン版「青春の一冊」を配信することができ、また読書感想文課題での貸出数の大幅な増加があり、さらに教科の調べ学習での貸出数と入館者数もむしろ増加しており、図書館利用の落ち込みはなかったようである。 ・次年度もコロナ感染予防対策を講じながら、読書と学習の場としての魅力ある図書館づくりに取り組んでいきたい。
	⑦ 悩みや問題を抱える生徒の早期発見に努め、教職員間の連携を密にしながら、生徒一人一人が希望を持って学校生活を送ることができるように支援する。	相談室を利用した生徒による学校評価アンケートの「気軽に相談でき利用しやすい」の項目で、「よくあてはまる」+「ややあてはまる」の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	[判定] C 76.2%	・相談室を利用した生徒が全校生徒中164名とあり、教育相談のため来室した以外の生徒も記入しているようである。 ・今後も悩みを抱えた生徒やその保護者が、気軽に相談室を利用できる環境づくりに努めていきたい。
学校関係者評価委員会の評価	・今年度はコロナの影響で様々な行事が中止になった。次年度は多くの行事の実施を望む。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策	・総体や学校行事は生徒が成長するには必要なものであることから今後も実施に向け検討していく。			
4 「正義を愛し、社会から信頼されること」を踏まえ、生徒とともに開かれた学校づくりに努める。  保護者懇談会、授業公開の機会の拡大を図る。地域社会と連携したボランティア活動を推進する。	① 保護者懇談会、PTA活動、いしかわ教育ウィークなどを通して積極的に学校を公開し、保護者や地域住民との連携を強くし、開かれた学校づくりをめざす。	今年度の「PTA総会」、「いしかわ教育ウィーク」、「生き方講演会」の保護者・地域住民の来校数が合わせて、 A 1200人以上 B 1000人以上 C 800人以上 D 800人未満	[判定] D	・今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、10月まで予定されていた「保護者懇談会」、「PTA総会」、「生き方講演会」等がすべて中止された。2学期以降、「いしかわ教育ウィーク」や「保護者懇談会」は実施されたが、PTA関係の行事はほとんど実施できなかった。 ・行事が少なかったせいか、「いしかわ教育ウィーク」には過去最多の381名の保護者が参加した。来年度も開催実現に向けて前向きに取り組みたい。
	② 理数科1、2年生、SSH委員、SS部及び科学系の部所属の生徒が「金沢泉丘サイエンスラブリ」、「創立記念祭における理科教室」等、自ら企画・運営・参加する機会を増やし、内容を充実したものとすることで、科学教育の面から地域に貢献する。	「理科教室や金沢泉丘サイエンスグランプリおよび金沢子ども科学財団との連携プログラムに参加して、どう思いますか」という質問に対して「大変良かった」と回答するプログラムの参加者の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	[判定] 今年度は新型コロナウイルスの影響で予定していた行事が縮小・中止となり、判断基準の材料となるデータを得られなかった。	・今年度の創立記念祭は新型コロナ感染拡大防止のため、在校生のみの参加となり、来場者に対するアンケート調査は実施できなかった。企画・準備・運営については、例年通り全て生徒が行った。 ・金沢泉丘サイエンスグランプリについては、新型コロナ感染拡大の影響による学校休校明けの6月に第1回を実施した。物理部の生徒が中心となって企画・運営を行い、1～3学年計266名の生徒が参加した。第1回はアンケート調査の準備ができず実施できなかった。 ・2月に実施予定であった金沢子ども科学財団との連携プログラムも新型コロナ感染拡大の影響で中止となった。

	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）および後期の扱い（改善策）
4	<p>「正義を愛し、社会から信頼されること」を踏まえ、生徒とともに開かれた学校づくりに努める。</p> <p>保護者懇談会、授業公開の機会の拡大を図る。地域社会と連携したボランティア活動を推進する。</p>	<p>③ 「学年だより」、「進路だより」等を通じて、保護者に学校の様子を理解していただく機会を増やし、保護者の学校行事への参加拡大につなげていく。</p>	<p>「学校からのたよりによって、学校の様子がわかる」と回答した保護者が、</p> <p>A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満</p>	<p>[判定]</p> <p>1年 B 85.9%</p> <p>2年 C 75.8%</p> <p>3年 B 86.5%</p> <p>[1年] 学校の様子と共に、学期ごとの予定表を保護者に配布した。年間行事予定は変更が多かったため、予定表は喜ばれた。（学年だより4回、学年通信7回、進路だより7回）QRコードはメール配信に添付すれば回答率が上がると思う。</p> <p>[2年] 年間行事の多くが中止になり、保護者への提供できる特別な情報が少なかった。修学旅行についてなど、学年独自では提供できない情報が多かった。次年度は行事以外でも様子をお知らせしたい。（学年だより3回、学年通信3回、進路だより9回）</p> <p>[3年] 「学年だより」3回、「進路だより」6回を発行。行事、生徒の様子、受験情報など提供した。今後もより充実した内容のたよりを提供していく。</p>
5	<p>組織運営・教職員の働き方の改善により、教育活動の効果を一層高める。</p> <p>・効率的で密度の濃い学習活動、部活動・生徒会活動の推進に努める。</p>	<p>① 業務の見直し、密度の濃い会議運営など組織運営の効率化、職場環境の改善、教職員の意識改革、時間管理の工夫等を進めることにより、教職員のワーク・ライフ・バランスをとり、教育活動の質の向上を図る。</p>	<p>ワーク・ライフ・バランスをとることにより、気力、知力、体力が充実し、一層効果的な教育活動を展開できていると回答する教員の割合が、</p> <p>A 80%以上 B 60%以上 C 40%以上 D 40%未満</p>	<p>[判定]</p> <p>A 97.1%</p> <p>・月二度（昨年度は月一度）の定時退校日、部活動休養日、夏季休業中の学校閉庁日の設定などを通して、限られた時間の中での業務効率の改善や、ワーク・ライフ・バランスを取ることへの意識は高まった。</p> <p>・今後はGoogle Formを活用した集計や、ICTによる教材開発及び教材共有などをさらに進めていきたい。</p>
学校関係者評価委員会の評価		<p>・様々な資料を公表するとき、学校の先生でしか分からない用語がときどき見られる。改善が必要。</p> <p>・今後も心身ともに充実した教育活動を推進してほしい。</p>		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策		<p>・学校内にいる教員は当たり前と思っていることでも、外部の方にはわからないことが多いことから今後改善していく。</p> <p>・充実した教育にあたるよう今後も努力していく。</p>		